

下益城郡富合町杉島の住宅地。明るい黄色の地に「なすな工房」と緑色で書かれた、のぼりがはためくパン工房がある。そこで障害のある利用者とともにパンを焼く村上佳代さんは「また、あしたね」と言ってお手振りながら帰っていく利用者たちを見送るとき、充足感に包まれるという。

村上さんが無認可の小規模作業所として「なすな工房」を開設したのは二〇〇三年四月。「地域の中で暮らしたい」という障害のある人たちの願いを、一緒に持ってかえたい」。そんな気持ちからだった。

村上さんは熊本学園大の学生のころ、ボランティアで障害者施設を訪問しているうち、将来の職業として福祉を考えるようになったという。経済学部だったが「職業にするなら知識も必

要」と卒業後、東京の専門学校で福祉について学び、神奈川県

の知的障害者施設に就職した。そこで渡された資料には、担当する障害者について、それまでの障害や生活の経緯、両親の思いなどがつづられていた。読めば読むほど責任の重さを感じた。その責任に応えようと心掛けたが、「この人には理解してもらえない」と判断したのか話を聞いてくれなくなる障害者も

いた。十分な対応ができない自分に腹立たしく、涙を流したこともあった。

だが落ち込むことばかりでもなかった。家族から虐待を受けていた二十歳前後の男性は、最初はいすや机を投げつけていたが、半年ほどたったある日、散歩に誘うと後を追ってきて手を握ってくれた。ちよっと寒い冬の日だったが、心が温まるのを感じた。



「地域に出てパンを売ることを通して、利用者さんたちは対人関係などに自信をつけていく」と語る村上佳代さん (右) 一富合町のなすな工房

障害者たちとパン工房 村上 佳代さん (40) 一富合町

その施設で五年過ごした後、両親がいる熊本に帰郷。また別の障害者施設で働いた。そんな中、「障害のある人たちが施設の中でなく、地域で暮らすことを支えたい」という思いが強まっていった。パン作りを選んだのも「通ってくる障害のある人たちが、いろんな所でパンを販売すれば人と接する機会にもつながる」と考えたからだった。

三十四歳で退職。空き店舗探しを始めたが、なかなか思うような物件は見つからなかった。見るに見かねた両親が「結婚したら近くに住んでほしい」と用意していた土地を貸してもいいと言ってくれた。工房の建築も何力所からも見積もりをとっているうち、村上さんの気持ちに理解を示した工務店が格安で応じてくれた。オープン、冷蔵庫などの備品はすべて中古品でそろえた。それでも、十年間働いて蓄えた貯金と退職金を全部はたいても足りず、数百万円の借金を背負った。

工房を始めて三年半。最初は二人だった登録者が、いまでは十人を超えた。今年十月、宇城地域の二市三町から地域活動支援センターの委託を受け、障害者とともに毎日、二十種類ほど



開設で背負った借金 悔いを残すことなく

のパンを焼き、役所や学校、病院、老人ホームなどで販売している。スポーツ大会の参加賞などに、まとまった数のお菓子の詰め合わせを注文してくれる地元企業もある。

工房には午前九時ごろ、知的身体、精神の障害がある利用者たちが通ってくる。一日の利用者は十人ほど。にぎやかな工房で、村上さんはオープンでパンを焼きながら配達の間までパンが出来上がるよう全体に目を配る。

出来上がったパンを販売に行くのを楽しみにしている利用者も少なくない。中には工房内や販売先で人と接するうちに自信を深め、就職へとつながっていく利用者もいる。

最近では「パン屋さん」と呼ばれることもある。村上さんはその響きがうれしくもある。「障害のある人たちが、サービスを受ける側ではなく、自分たちで作ったパンを売る立場にいると社会から思ってもらえているんです」

利用者たちが家路に就くのは午後四時。その姿を見届けると、「きょうも一日、皆を支えることができた」と感じるという村上さん。利用者が帰った後も、後片付けや翌日の準備など仕事は続く。

毎朝五時に起き十二時間以上働く日々。収入も減っていたころの三分の一以下に減った。それでも「始めていなかったら、今も迷い続けていたでしょう。そして、私の人生に悔いが残っていたと思う」。明るく笑った。

(中原克也)

熊本日日新聞

発行所
熊本日日新聞社
〒860-8506
熊本市世安町172
☎代表(096)361-3111
© 熊本日日新聞社 2006

11月20日
(月曜日)